

6. 国友遺跡と湖北地方の集落 ―集落論研究ノート― (図83)

今回の調査では直接集落に関連する遺構を検出することができなかったが、自然流路に埋没した多量の生活物資を出土した。それらは土器類であり、木製品であり、若干の石製品、鉄製品であった。湖北地方における弥生時代から古墳時代にかけての遺跡においては、これまでの調査データを見ても明らかなように、多量の遺物を出土するするが、集落を構成する遺構の検出例が極めて少ないのが現状である。従って、遺構からの正当な集落論を展開していくには極めて困難を伴うのである。しかし多量の遺物は、集落での人々の生活様式の一端を物語るであろうし、集落経営の時間的な継続性を引き出すことができる。特に後者の点に関しては、弥生時代以降長時間の遺物を出土する遺跡や、極めて短時間の遺物しか出土しない遺跡など、タイムスケールに乗せてみた場合、遺跡によって極めて多様な在り方を示していることが知れる。国友遺跡の場合いわゆる庄内並行期の一括遺物のほか、布留新段階以降須恵器におけるⅡ型式1段階までの時期の大別して2時期の遺物を出土しており、集落の経営時期をこのことから推察することが出来るのである。湖北における弥生時代から古墳時代にかけての諸遺跡に対して同様の視点を持ち、タイムスケールに乗せた場合にどのような傾向が出てくるのか、以下において研究ノート風に予察してみたい。なお、ここで取り上げる遺跡は既に発掘調査が実施されているものであり、また、墓地遺跡についても一集落の墓域と考えられるので取り上げることにするので予めお断りしておく。

1 (余呉町坂口遺跡)

山丘裾部の台地に立地するもので、6棟の竪穴住居跡が検出されている。出土土器類は弥生時代終末から布留式の前段階までのものであり、住居跡は庄内並行期のものである。

2 (余呉町桜内遺跡)

山丘裾部の扇状地形を呈する台地状に立地している。坂口遺跡とはその南約350m程のところに位置している。両遺跡は舌状の山丘を挟んでおり、集落単位としては全く別のものである。墓域と居住域とを明瞭に区別して、ともに一単位の集落のほぼ全容を知ることができる遺跡である。現在未整理であり、正確ではないが、およそ弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落、古式の須恵器を出土する時期のもの、7世紀以降奈良時代にかけてのものの3時期のものがいずれもほぼ同じ範囲で重複して検出されているようである。一部層位的に重なっており、また多量の土石流を思わせる礫石が散乱しており、集落としては、土器類が示すように、継続的に存続したものではないと考えられる。すなわち、同じ範囲において、極めて短時間の集落が少なくとも3時期に渡り営まれたものと見ることが出来る。

3 (高月町妙光庵遺跡)

余呉川に近い低湿な平地に立地している遺跡である。狭い範囲の調査であるが、弥生時代の畿内Ⅰ様式中段階の土器類を出土した土壌1基を検出している。他の遺物は平安時代以降のものであり、Ⅰ様式中段階の最北部に位置する遺跡である。

4（高月町円通寺遺跡）

平地に立地する遺跡で、庄内並行期と考える一括土器類を出土した溝跡1条を検出している。付近の包含層からは、7世紀に下る須恵器類を若干出土しているが、主流はやはり溝跡と同時期のものである。

5（高月町唐川遺跡）

湖北平野の奥部、涌出山の南側の平地に立地する遺跡である。竪穴住居が3棟検出されており、出土土器は弥生時代のV様式の終わりから庄内並行期のものと思われる。以降のものとしては、遺構は検出されていないが、古墳時代後期の6世紀後半から奈良時代、及び平安時代のものが出土している。

6（高月町大森遺跡）

余呉川右岸の平地にある遺跡で、弥生時代中期から古墳時代初頭の多量の遺物と古墳時代後期から平安時代前期の竪穴住居や掘立柱建物などが検出されている。

7（高月町井口遺跡）

高時川の右岸で7世紀から13世紀にかけて極めて長期間営まれた集落跡である。以前においては、弥生時代のIV様式の土器類を出土した竪穴住居跡を検出している。土器類は、弥生時代中期のものほかに、古墳時代初頭のものもある。

井口遺跡の北側に隣接して保延寺大海道遺跡があるが、ここでも同時期の土器類及び住居跡が検出されている。距離的に極めて接近しており、同一集落と見てよからう。従って、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての時期に営まれた集落が存在していたと考えることができる。

8（高月町高月南遺跡）

高時川の西側に沿った遺跡で、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居、方形周溝墓、古墳時代後期から平安時代の集落跡が検出されている。集落のタイムスケールは井口遺跡に似ている。

9（湖北町今西遺跡）

余呉川河口近くの低地に立地する遺跡である。炉跡を伴う竪穴住居1棟を検出している。住居は布留式の古段階のものと思われるが、その他溝跡等から庄内から布留式の中段階のものが出土している。この時期以降のものでは、古墳時代後期の6世紀中頃から奈良時代前期、及び平安時代後期の遺物が出土している。

10（湖北町留目遺跡）

虎御前山の東、田川の西岸に接した平地に立地している遺跡である。住居跡は検出されなかったが、20数基の土壇墓群が発見された。これらは弥生時代終末から古墳時代中期、布留式の新段階までの比較的長い期間に作られた墓地遺跡のようである。以降のものは鎌倉時代にまで下るものである。

11（湖北町丁野遺跡）

高時川の左岸、小谷山の西側に位置する独立丘陵である丁野山のうち山脇山と称される尾根の上に立地する集団墓である。30数基の土壇墓が検出された。土壇墓から直接土器類等の遺物は出

土しなかったが、付近より弥生時代中期後半に遡ると思われるものや古墳時代初頭のものを含み、弥生時代後期のものを中心として出土している。これ以外では、後期古墳、奈良時代の鍛冶炉等が検出されている。

12 (湖北町伊部遺跡)

小谷城のある小谷山の南で、それから派生して現在独立丘陵となっている雲雀山の西側の平地に立地するものである。工事中の出土遺物と1条の溝状遺構からの出土遺物とがあるが、溝状遺構からは弥生時代後期、V様式の新しい段階の一括遺物と考えられる土器類が出土している。その他の遺物は出土していない。

13 (虎姫町五村遺跡)

姉川の北側に位置する遺跡である。遺跡の北から東にかけての範囲で方形周溝墓群、南から西にかけての範囲が住居域と考えられる状況にある。多量の土器類や木製品、巴形銅器などが出土しているが、土器類は畿内IV様式からV様式のものである。この他のものは平安時代まで下るものである。

14 (近江町宇賀野遺跡)

湖岸に近い低湿地に立地する遺跡である。線状の調査であったが、多数の溝状の遺構を検出した。この溝跡の中から弥生時代のIII様式を中心とする多量の土器類が出土した。溝跡の上層からは古墳時代後期の土器類が出土している。

15 (近江町奥松戸・法勝寺遺跡)

宇賀野遺跡よりやや内陸部によった遺跡である。土川を挟んで北より西火打・奥松戸・法勝寺・狐塚の4遺跡が並んでいるが、性格的には一連の遺跡と見る事が出来る。方形周溝墓、竪穴住居跡、井戸跡、古墳、掘立柱建物跡、居館跡など多数の遺構を検出している。時期的には、弥生時代中期IV様式から後期V様式までの方形周溝墓及び竪穴住居跡があり、土器類では布留式の古段階のものまでである。この時期以降では、6世紀代に下る古墳があり、更に奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物、平安時代の建物跡などがある。なを、近接する法勝寺廃寺では5世紀代に遡る古式の須恵器が出土しており、廃寺は白鳳時代のものである。

16 (近江町長沢遺跡)

奥松戸遺跡の北300m程のところに位置する遺跡である。2条の旧河道と杭列とが検出されている。両河道共に弥生時代中期から後期、IV様式からV様式までの土器類が出土している。その他の土器類は見られない。

17 (米原町入江内湖遺跡)

湖北平野の南端に位置する旧入江内湖及びその周辺の遺跡である。内湖及びその周辺からは多量の土器類や木製品が出土しているが、これまでの調査では古墳時代の布留式並行期のものを中心とした出土状況にある。しかし、弥生時代の前期から古墳時代後期まで、多寡はあるが、連続として遺物の時代を捨うことができる。この傾向は縄文時代においても、近年調査された磯山城遺跡から明らかにされている。奈良・平安時代の土器類もあり、遺跡の継続期間からすれば極め

て長期間内湖を含めて、それを取り巻く集落が存在していたものと思われる。

18（長浜市鴨田遺跡）

平地にある遺跡で、多条の溝跡や沼沢地などが調査され、近年方形周溝墓が確認されている。弥生時代中期のⅢ様式から古墳時代の布留式の段階までの土器類、木製品等が多量に出土している。須恵器類は共伴していない。

19（長浜市永久寺遺跡）

鴨田遺跡の東側に位置する遺跡である。これまで4回ほどの調査がなされているが、方形周溝墓、掘立柱建物、環状に巡る溝跡などが検出されている。方形周溝墓は弥生時代後期後半のものであり、環状の溝跡からは庄内頃までの土器類が認められる。しかし弥生時代中期に遡るものは認められない。このほかには、古墳時代後期後半の須恵器類や奈良時代のもの、平安時代後期頃のものなどが少量ながら出土している。

20（長浜市大辰巳遺跡）

永久寺遺跡に隣接する遺跡である。かつて、中学校建設の折り等に弥生時代Ⅱ様式の流水文を施す土器を始め、Ⅳ様式からⅤ様式のものを中心とする土器類の出土をみている。またかつてⅠ様式新段階の資料が紹介されたことがある。この遺跡の西側に常楽寺遺跡があるが、やはり同時期幅に納まる土器類が出土している。

21（大東遺跡）

永久寺遺跡の北側に位置する遺跡である。7世紀中頃から8世紀中頃の掘立柱建物や瓦溜りなどが検出されている。このほかに方形周溝墓が2基見つかった。弥生時代後期の前半と後半に作られたものである。

22（長浜市宮司遺跡）

溝跡(水路)、ピット、井戸跡などが検出されている遺跡である。溝跡1からは縄文時代晩期後半のもののみが出土し、溝跡2からは弥生時代前期中ないし新段階の土器類が出土している。このほか古墳時代後期から平安時代全般のものが出土している。

23（長浜市十里町遺跡）

多数の自然流路及び人工水路が検出されている。縄文時代晩期及び弥生時代前期の土器類が出土しており、両者は伴出する可能性がある。中期の土器類の出土はなく、後期から庄内並行期の土器があり、最近庄内並行期の方形周溝墓が検出されている。古墳時代のものは見られず、奈良・平安時代に再び出現するようである。

24（長浜市川崎遺跡）

湖北地方において弥生時代前期中段階の土器類が初めて確認された遺跡である。その後の調査によって縄文時代中期初頭から晩期にかけてのもの、が新たに確認されたが、弥生時代に関しては、前期のものがやはり中段階から新段階のもので中期に継続していないことが再確認されている。ただ、形式的には古段階に属するものも出土している。そのほか弥生時代後期から古墳時代前期、布留式段階のものがある。須恵器は伴わない。さらに7世紀後半の白鳳時代から奈良時代

末期のものがある。

25 (長浜市越前塚遺跡)

方形周溝墓群や古墳群が検出されている遺跡である。弥生時代には、Ⅲ様式を含みⅣ様式からⅤ様式にかけての方形周溝墓がある。古墳時代には庄内から布留式にかけての方形周溝墓、中期末の前方後円墳や円墳、後期の古墳群などが検出されている。また、最近平安時代後期の掘立柱建物がみついている。

26 (長浜市高田遺跡)

長浜市街地の低地に位置する遺跡である。包含層から弥生時代後期から布留式並行期までの土器類や木製品、5世期末から8世紀初頭までの須恵器類などが出土している。

27 (長浜市熊岡山西遺跡)

長浜平野の東を界する横山の山裾に位置する遺跡である。包含層から弥生時代後期から布留式並行期のものまで出土している。また、調査範囲外であったが、古墳時代後期の須恵器類の出土を確認している。

以上湖北地方における弥生時代から古墳時代にかけての遺物を出土している主な遺跡27箇所を紹介してきた。これら遺跡から出土した土器類を中心に遺跡の継続時間を表にしてみた。この表を見ながら湖北地方の集落跡の有り方を眺めてみたい。

弥生時代前期から始まる集落は6箇所認められるが、この中で縄文時代の遺物を出土している遺跡が4箇所みられる。晩期あるいは中期末から晩期にかけての土器類を出土しているが、これらはあるいは弥生土器と共伴する可能性があるものもある。縄文時代と弥生時代との接点については今回の検討から省くが、弥生時代前期から始まる遺跡には、新段階あるいは中段階から新段階にかけての土器類が出土しているが、6遺跡中4遺跡までが中期の土器類を出土せず、極めて短期間の集落となっている。入江内湖遺跡、大辰巳遺跡は共に新段階のものを出土しているが、この両遺跡は、以降弥生時代全般にわたって集落が継続しているようであり、遺跡の範囲も入江内湖遺跡では内湖を含むその周辺に多数の遺跡が存在しており、大辰巳遺跡においても、永久寺遺跡や常楽寺遺跡などを包括して捕らえられるものである。

弥生時代中期から始まる遺跡は7遺跡を数えるが、Ⅲ様式から始まるものは僅か3遺跡である。このうち宇賀野遺跡については未整理で明確でないが、鴨田遺跡では古墳時代中期まで、越前塚遺跡では布留式の古段階までの継続期間がある。この傾向はⅣ様式から始まる他の遺跡についても庄内あるいは布留式段階までの継続期間をもっている。しかし、鴨田遺跡の例が最も長い期間であって、古墳時代中期に至るまでに消滅している。Ⅴ様式から始まる遺跡においてもこの傾向は見られ、古墳時代中期に継続すると思われるものは僅か高田遺跡にその可能性を見るにすぎない。

古墳時代前期に始まる遺跡は、庄内並行期のものが数例見られるが極めて短期で終わるものである。弥生時代から継続するものを除いて現在のところ皆無である。

古墳時代中期に始まる遺跡も同様であり、中期末の古式の須恵器類を出土する4例を見るにす

ぎない。

古墳時代後期に始まる遺跡には奈良・平安時代に続く長期間継続するものが5例みられる。奈良時代に継続しないものとはほぼ同数である。

奈良・平安時代に始まるものでは、平安時代後期に集落の形成の見られるものの数が多く見られる。また、短期間のものが多い。

以上が表から読み取れる湖北地方における集落遺跡の傾向である。遺跡だけから見れば弥生時代から平安時代までの長期間の遺物が出土しているが、期間内に断続があり、集落そのものが長期間存在したわけではないことは当然である。さて、湖北地方に到達した弥生文化は、前期の中段階に湖北平野の奥部、高月町の妙光庵遺跡まで達しており、各地に集落を形成させている。その中には、長浜市の宮司・十里町・川崎遺跡などのように縄文文化を先行して持ち、あるいは併存させているものもある。しかし、前期に成立した集落も多くは湖北地方の主要集落とはなり得ず、中期に至るあたりで消滅しているようである。弥生文化を受容し、継承させているのはわずかに入江内湖・大辰巳遺跡の2遺跡にすぎない。この2遺跡は古墳時代前期、さらには平安時代までの極めて長期間継続しているのであり、その後に成立してくる集落の母村的役割を担うものとする。湖北に弥生時代集落が多数成立してくるのは中期中頃から後半にかけてである。浅井町、伊吹町、山東町など標高の高位にある地域を除いて、やはり低位の地域に限られるが、湖北のほぼ全域に布分している。この段階に成立した集落はおおよそ古墳時代前期まで存続しているものが多く、比較的安定した時期であると言える。鴨田遺跡は中期中頃から始まるが、大辰巳遺跡と至近距離にあり、集落規模の拡大が予想されるところである。後期には集落の数は極めて多数となり、余呉町や浅井町、山東町など標高の高位の地域にまで集落の成立を見るのである。ただこの時期に成立する集落は古墳時代中期以降にまで存続するものが極めて稀である。このことはそれ以前に成立している集落についても同様であり、湖北地方の際立った特徴となっていると言える。古墳時代の新たな集落の成立は、多くが後期であり、長期集落と短期集落とが存在する。古墳時代後期以後の長短両期集落の関係、特に平安時代後期のものについては以前に意見を述べたことがあるが、古墳時代から奈良時代前期頃までの間でも短期間のものがある。

次に遺跡の分布状況については、弥生時代前期の集落は前期の土器の出土が伝えられている湖北町今地先、及びびわ町大安寺地先を加えれば、およそ5km以内の距離で南北に分布している。この距離は日常活動範囲内である。弥生時代中期の集落は、湖北町から高月町の間でやや空白が生じているが、中期の土器類を出土している虎姫町中野地先を加えれば、2km前後とさらに集落間の距離が短くなり、大辰巳・永久寺・鴨田遺跡、あるいは長沢・奥松戸・宇賀野遺跡などは1km前後の距離にあり、入江内湖遺跡も内湖を中心とした遺跡の集合であって、これら集落範囲に日常活動以上のことを想定することも可能である。弥生時代後期には集落の密度が集落数の増加と共に濃くなっているが、中期に見られた大辰巳遺跡周辺、及び奥松戸遺跡周辺また入江内湖遺跡周辺の濃度に変化はない。古墳時代後期頃に成立する集落については、ここに取り上げた弥生時代の土器類を出土しているもの以外に多数のものがあ、また、後期古墳の分布とも関連してく

湖北地方集落跡 一覧表

No.	市町名	遺 跡 名	縄 文 時 代			弥 生 時 代			古 墳 時 代			奈良時代	平安時代	備 考
			中期	後期	晩期	前期	中 期	後期	前期	中期	後期			
1	余呉町	坂口遺跡							—					住居跡
2	〃	桜内遺跡							—	—	—			住居跡・墓跡
3	高月町	井口遺跡					—		—		—			住居跡
4	〃	高月南遺跡						—			—			住居跡・墓跡
5	〃	唐川遺跡						—						住居跡
6	〃	円通寺遺跡						—						溝跡
7	〃	妙光庵遺跡				—								土壇
8	〃	大森遺跡					—	—						住居跡
9	湖北町	今西遺跡							—		—		—	住居跡
10	〃	留目遺跡							—	—				墓跡
11	〃	伊部遺跡						—						溝跡
12	〃	丁野遺跡					—	—						墓跡
13	虎姫町	五村遺跡					—	—					—	住居跡・墓跡
14	近江町	宇賀野遺跡					—							溝跡
15	〃	奥松戸遺跡					—	—			—			住居跡・墓跡
16	〃	長沢遺跡					—	—						溝跡
17	米原町	入江内湖遺跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	包含層
18	長浜市	鴨田遺跡					—	—						溝跡・墓跡
19	〃	永久寺遺跡						—			—		—	溝跡・墓跡
20	〃	大辰己遺跡				—	—	—						包含層
21	〃	大東遺跡						—			—		—	墓跡
22	〃	宮司遺跡		—	—	—					—		—	溝跡
23	〃	十里町遺跡		—	—	—		—			—		—	包含層
24	〃	川崎遺跡	—	—	—	—		—	—		—			溝跡
25	〃	越前塚遺跡					—	—			—		—	墓跡
26	〃	高田遺跡						—	—	—	—			包含層
27	〃	熊岡山西遺跡						—	—					包含層
28	〃	国友遺跡						—		—	—			溝跡

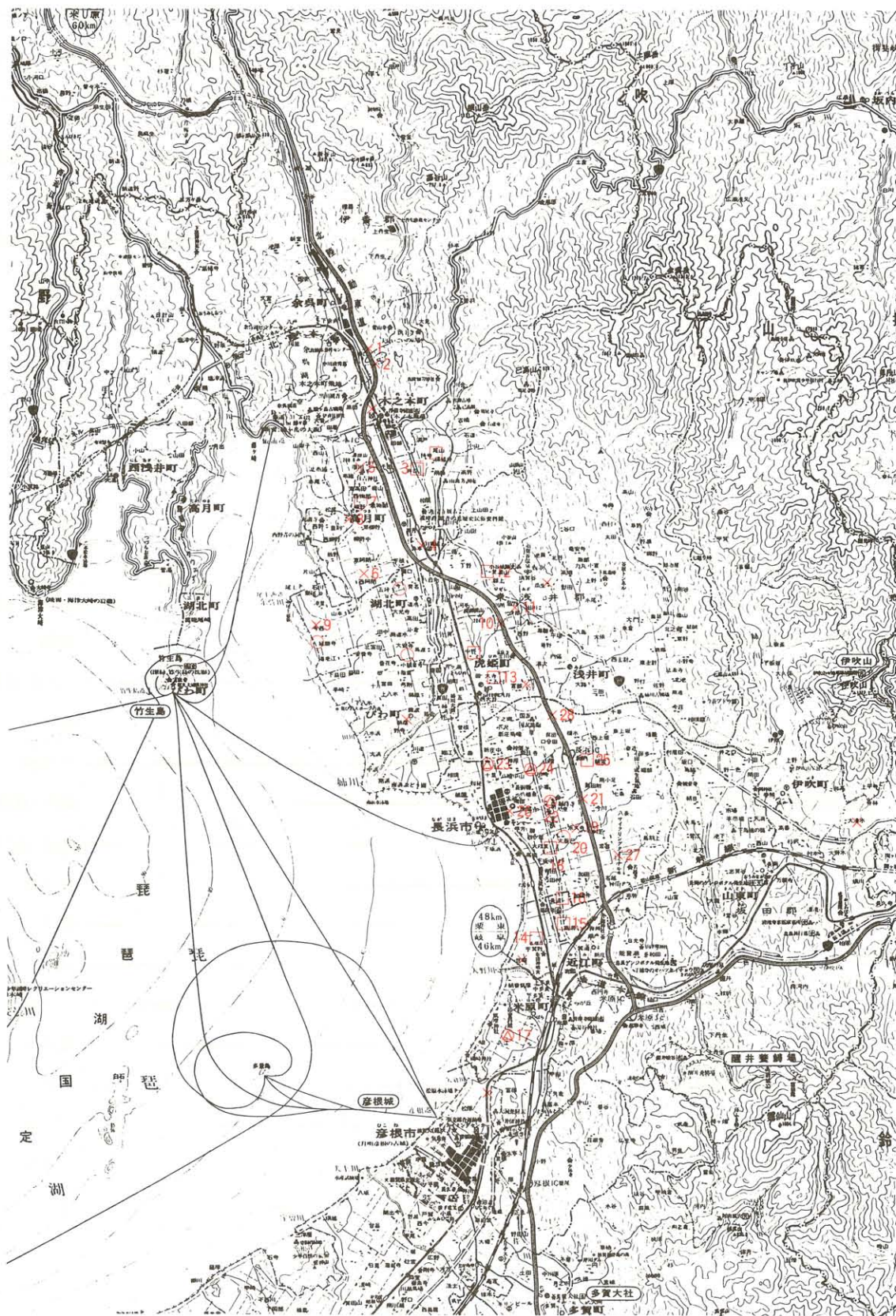


図83 集落跡分布図 (○弥生時代前期成立(縄文晩期土器伴出), ○弥生時代前期成立)
 □弥生時代中期成立, ×弥生時代後期～古墳時代前期成立
 (数字は表No.に一致。ただし表以外の主な遺跡も加えた。S=1/60,000)

るので、ここでは省略することにする。

以上、湖北地方の集落跡について概観してきたが、縄文時代と弥生時代との接点の問題、古墳時代前期後半から中期の間での集落の空白期間の存在の問題、弥生時代及び古墳時代後期以降の両集落群での長期集落と短期集落との問題など数多くの問題点のあることが判明した。遺構や遺物をも加えた資料操作が、こうした問題を解明していく上に、またさらに大きく集落論を展開していく上には必ず必要であろう。本書ではこれ以上検討を加えず、問題を後日に残したい。

7. おわりに

いわゆる庄内並行期のMIII、布留新段階以降、古式の須恵器を出土するMI、8世紀中頃のMII、12世紀後半のMIV、その他のもの2条を検出しているのであるが、MIIIは庄内並行期の土器としては一括性を持つものである。また、MIはMIII出土のものと並行するものを除けば古式の須恵器類を伴出する時期の良好な土師器の資料といえるものである。更には、性格の不明なものが多いが、多数の木製品が出土している。農耕具や紡織具のほかに、梯子などの建築部材、従来弓として取り上げられていたものであるが、大足などの杵材ではないかと思われるものなど当時の生活資料として再考を要するものが出土した。鑄造製の鉄斧、我が国最古の火打ち金具など注目すべき鉄製品なども出土している。こうした多数の資料を出土した溝跡を検出したのであるが、こうした溝跡にさらに検討を加えていくことによって、現在見られる条里型水田開発に至る経過をたどれる可能性があることも判明した。

発掘調査を実施してから12年が経過してしまったのであるが、以上のように、ようやくここにその成果を公表する運びになった。時間が経過した割りには不十分なものになったが、ここに報告する次第である。